徳島県立博物館

No.67

博物館ニュース

MUSEUM NEWS

ヘルクレスオオカブト
（南アメリカ、コロンビア産）

甲虫類（甲虫目または鞘翅目）は、カブトムシやクワガタムシなどのなかまです。背中に硬いヨロイをつけているように見えますが、これは前ばねが硬くなって腹部を覆っているもので、ほとんどのものは背中側から見ても腹部は見えません。甲虫類は昆虫の中でも、もっともなかまの多いグループで、世界でおよそ40万種が知られています。

最近、外国産のカブトムシやクワガタムシの多くの種が、許可をもらえば日本へ生きたまま持ち込んでもかまわないことになりました。そのため、上の写真のように、これまでは標本でしか見ることのできなかった外国産の種を、生きたまま見ることができるようになっています。これはとてもうれしいことですが、一方では、外国のクワガタムシが、野外で見つかる例も増えてきています。はたして日本のカブトムシやクワガタムシとの関係がどうなるのかはまだよくわかっていません。日本のものと混ざることがあるかもしれませんし、ほかのいろいろな種に対してどのような影響があるかもわかりません。飼育するときは、最後までちゃんと責任を持って飼いたいものです。

（昆虫担当：大原賢二）

小正月の火祭りと2つのサギッチョ（左義長）

磯本　宏紀

小正月の火祭り

1月7日から15日頃にかけて、正月行事の1つとして各地で火祭りが行われます。竹や木を組み、羊歯などを巻き付けてつくり、それに正月の注連飾りや札、達磨などを入れて焼きます。子どもが取り仕切ることも多く、各地区の広場や村境、浜に集まって行われます。数ある正月の火祭りの中には、国の重要無形民俗文化財の指定を受けているものもあります。

徳島県内の海部地方では、現在も大きな火祭りを見ることができます。全国的にみるとトンド、サギチョウ、ドウソジン、サンクロウなど様々な呼称がありますが、海部地方では概ねサギチョウとかサギッチョと呼ばれることが多いようです。そして、火祭りのことだけでなく、火祭りで燃やされる竹組もサギッチョとかヤマなどと呼ばれています。ここでは煩雑になるのを避けるため、小正月の火祭りのことをサギッチョ、焼かれる竹組の構造物そのものをヤマと呼び、その形態と背景について検討してみることにします。

ヤマの特徴

毎年つくられるヤマは、燃やされて跡形もなくなるのですが、そのつくり方、形、つくられる場所など少しずつ地区によって異なっています。川部計美氏は「海陽町久保地区の左義長」の中で、サギッチョについて実際に体験したときの思い出を絡めながら紹介しています。久保地区では、大小2つのヤマをつくります。大の方が玄関、神棚、荒神などの注連飾り、船に付ける松飾りなどの正月飾りを一緒に焼き、小の方が便所につけた注連飾りを焼くという風に区別してつくられるそうです。それから、ヤマには上に赤色、下に白色の三角形の短冊が付けられています。地区によっては長方形のものを使うこともあるのですが、紅白の短冊ということで、着目してみたいと思います（図1、2）。

大小2つのヤマの内、小さい方のヤマがケガレたイメージのある便所のお飾りを燃やす方なので、ケガレのサギッチョとして、そのほかの場所に飾る正月飾りをハレの飾りと考えると、ハレとケガレという概念で説明できます。「小」の方が「便所のヤマ（サギッチョ）」といわれることもあります。一方、「小」の方を子どもが所管するヤマとする伝承もあります。

2つのヤマをつくること

なぜ明確に区別して2つのヤマをつくっているのか、はっきりしたことはわかりません。柳田（1990）所収の『神樹篇』の中で、「硫黄島七月十五日の柱松に、大小二本の柱松明を立てて点火の遅速を争い、かつ小さい方をもって子供仲間の所務とする風習」など2つの神樹をたてる習俗が紹介されています。盆の火祭りの事例ですが、子

図1　久保地区の2つのヤマ（2007.1.14）

図2　西南地区の2つのヤマ（2007.1.14）

どもが扱うヤマという点では、先の久保地区の伝承と一致します。そして、火をつける順もその年の恵方に向かってつくられた「大」の方から点火することになっています。2つのヤマへの点火の遅速から、その年の吉凶を占う性格を行事での決まり事として残しているのかもしれません。

久保地区の近隣、宍喰浦（浜）、西南地区、西北地区など、海陽町内でも同様に大小2つのヤマがつくられています。ただし、同じく近隣の竹ヶ島ではヤマは1つだけしかつくられませんし、この地域の特徴をどうみるべきなのか、さらに検討の余地を残しています。

ムラとイエの正月飾り

ヤマを2つ作ること、紅白で三角形の短冊をつけることの2つの特徴についてもう少し見てみましょう。海陽町の隣の牟岐町でも、1つのヤマに不規則に長方形の白色の短冊がつけられています。旧海南町や高知県東洋町甲浦のヤマでも、1つのヤマに紅白の短冊がつけられ、少しずつ様子は違いますが、短冊を付ける事例がほかにもあります（岡田、2002）。1つのヤマに紅白の短冊がつけられ、短冊は形や付け方は違うものの、同様の事例を海部地方で確認できます。

ところで、海陽町竹ヶ島では、各家の正月飾りとして、紅白の短冊をつけた竹を戸口に立てています。これらを注連飾りと一緒に持ち寄り、サギッチョのときに焼きます。ほかの注連飾りと同様に、イエ（以下概念として区別するため片仮名で記します）としてつけていた飾りを、ムラで持ち寄って焼きます。

ムラでつくったヤマを、戦前にはよそのムラの若衆や子どもがやってきて壊し、火をつけるということもあったようです。一見すると若者同士、子ども同士の喧嘩なのですが、相互のムラの対抗関係、ムラ同士の戦いの要素を残存させた事象ともいえます。サギッチョのときの火で餅を焼いて食べ、橙を焼いて煎じて呑むと風邪をひかない、病気をしないとされます。紅白の短冊の燃え残りを持ち帰り、各家の神棚や荒神に供えたり、燃え残った竹を使って家の雨樋にしたりしていました。イエからムラに持ち寄り、燃え残りを再びイエに持ち帰ります。サギッチョを介して、イエを結びつけ、ムラとして結集させていた役割を、この小正月の火祭りに見ることができます。

こう考えると、竹ヶ島の事例が興味深く思われます。各家の玄関に、竹に紅白の短冊をつけた飾りをおき、竹ヶ島全体で1つのヤマが浜につくられます（図3、4）。周辺地域ではほかに見られない事例です。各地区で2つのヤマをつくっていることと何か関係があるかもしれません。いずれにしても、この問題についてはもう少し掘り下げて考えてみる必要があると思っています。

（民俗担当）

図3
竹ヶ島のヤマ
（2007.1.14）

《参考文献》

岡田一郎　2002　「海部の火祭りー左義長についてー」海南町文化のまちづくり実行委員会編『伝統行事・年中行事を「伝える」シンポジウムー今なぜ伝統芸能や年中行事の見直しが必要かー』同会

川部計美　2007　「海陽町久保地区の左義長」『徳島地域文化研究』5

柳田国男　1990　『柳田国男全集14』筑摩書房

図4　竹ヶ島・家の前の竹の飾り（2007.1.13）

情報ボックス

高知県四万十市から発見されたオウムガイ化石

博物館では、しばしば一般の方から「化石を採集したのですが、名前を教えてもらえませんか？」との問い合わせがあります。ほとんどの場合、持ち込まれた化石は、多く産出するありふれた種類ですが、時には非常に珍しく、学術的にも貴重な場合もあります。

以前、高松市在住の化石愛好家：岩田博英さんから、高知県四万十市佐田で採集した化石の鑑定の依頼がありました。ここには白亜紀末期（約8000万～6500万年前）とされている石灰岩があり、古くから二枚貝化石の産出が知られています。しかし、持ち込まれた化石は二枚貝化石ではなく、アンモナイトなどによく見られる縫合線をもつ化石でした（図1）。その縫合線の形は湾曲した漏斗状をしており、白亜紀よりも古い、古生代（約5億4000万～2億5000万年前）という時代のアンモナイトのものに似ていました。白亜紀の地層から古生代のアンモナイトが産出するはずもなく、殻の形態からオウムガイ類に属する化石であるとすぐに判断できました。後日、細かな種類について文献等で調べた結果、アツロイデア（*Aturoidea*）と呼ばれるオウムガイ類であることがわかりました。

アツロイデアは、白亜紀後期から古第三紀始新世（約5600万～3400万年前）の地層から知られており、これまでにイギリス、オーストリア、リビア、アンゴラ、インド、アメリカ、ペルー、オーストラリアのほぼ世界中から、少なくとも13種類が報告されています。しかし、その産出量は非常に少なく、ほとんどの種類で1個体または数個体しか報告されていません。もちろん、日本からの産出もこれまでなく、東アジア地域からの報告もありません。また、白亜紀という時代に限れば、リビア、アンゴラ、インドの3カ国のみであり、この標本は白亜紀の地層から発見された数少ない記録であり、さらに日本を含む東アジア地域からの初産出となります。

アツロイデアは、産出する時代によって漏斗状の縫合線の形態に微妙な違いがあります。白亜紀から知られる初期のアツロイデアはやや丸みのある縫合線をもちます。一方、古第三紀始新世から知られるものはやや尖りのある縫合線をもちます。今回、採集されたアツロイデアは、白亜紀の地層から産出したにもかかわらず、これまで知られている白亜紀のものと形態が異なり、やや尖りが見られました。その縫合線の形態は、ちょうど白亜紀タイプと第三紀始新世タイプの中間の形態をしています。今後、さらに調査が必要ですが、もしかしたら、この標本は新種の可能性があるかもしれません。今後の研究の進展をお待ち下さい。

なお、この標本は学術的にも貴重であるため、岩田さんのご理解を得て博物館にご寄贈いただきました。

（地学担当：辻野泰之）

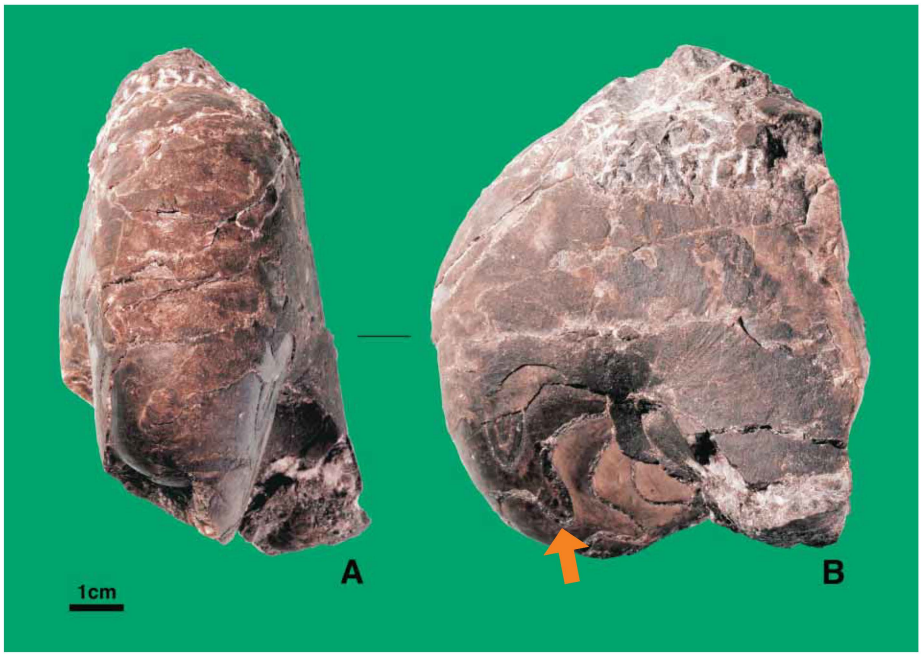


図1　佐田石灰岩から産出したオウムガイ化石：アツロイデア。A:：腹面　B：側面
矢印：漏斗状の縫合線。

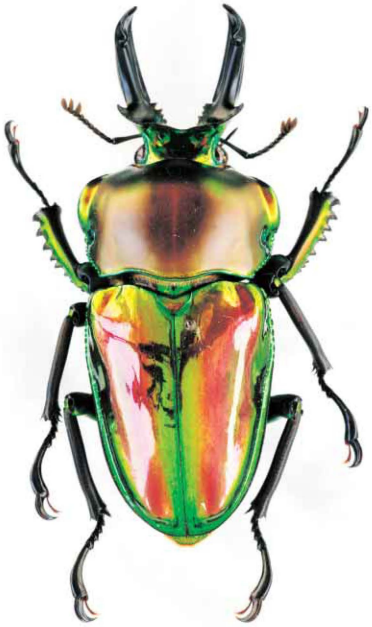
平成19年度第2回企画

世界の甲虫

ー石田コレクションのビートルズー

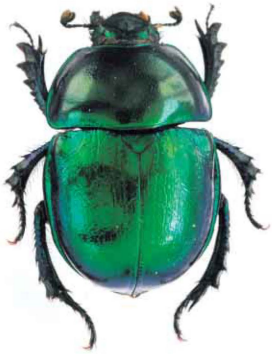
すべての生物の中で、もっとも種数の多いのは昆虫のなかまで、その種数は100万種とも150万種ともいわれます。その中でも、もっとも種数が多く（約40万種）、形や色のすばらしいのが、甲虫類（beetles ビートルズ）です。

今回の企画展では、故石田正明氏の7万個体にも及ぶコレクションを紹介し、甲虫類の魅力をさぐります。石田氏は、日本産のコガネムシのなかまを中心に研究された方です。しかし、コガネムシにとどまらず、甲虫類は何でもお好きで、カブトムシ、クワガタムシやフンコロガシのなかまなど、ほかのグループも世界中から収集しておられました。このコレクションで甲虫類のすばらしさをご覧ください。

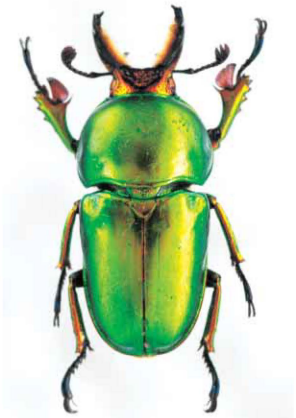


ニジイロクワガタ
（オーストラリア）

■会　　期　7月21日（土）～9月24日（月）
■休 館 日　7月23日・30日、8月6日・20日・27日、9月3日・10日・18日
■会　　場　博物館1階企画展示室
■観 覧 料　一般200円/高校・大学生100円/小・中学生50円
＊20名以上の団体は2割引、土・日・祝日・長期休業中の小・中・高校生および学校の遠足は無料。
■展示解説　8月5日・19日（日）午後2時から2時30分まで



センチコガネのなかま
（イタリア）



ラトレーユキンイロクワガタ
（オーストラリア）

マルガタクワガタ
（南アフリカ）

タマオコガネの一種
（ケニヤ）

館蔵品紹介

大般若経巻521

大般若経とは、大般若波羅蜜多経の略称で、全600巻からなる膨大なものです。日本では、8世紀に読まれたのを最初として、以後、宮中や各地の寺社で読まれたり、書写･奉納されたりしました。

今もいろいろなところに大般若経が伝えられていますが、長い歴史の過程で、一部が欠巻になったり、料紙がはがれて原状をとどめなくなったりしていることが少なくありません。しかし、大般若経には、書写の日にちや場所、書写者の名前などが書かれていることが多いので、完全な形ではないにしても、史料として活用できる場合が少なくありません。

さて、今回紹介する大般若経は、2003年11月、県内の個人宅で学芸員数名による調査をしていた際に発見したものです。関連のない写経の断簡などと共に木箱に収められていました。

この経巻は黄染楮紙に肉筆で書写されており、奥書には「嘉慶二年戊辰二月廿三日」「禅宴坊筆」と書かれています（図1）。これを手がかりに、経巻がどこから来たのか検討しました。

禅宴坊が登場する資料としては、神山町阿野の勧善寺が所蔵している大般若経（徳島県指定有形文化財）があります。勧善寺の大般若経は、1387年（至徳４･嘉慶元）から1389年（嘉慶３･康応元）にかけて書写されており、近世末までは神山町の二之宮八幡神社に伝来しました。調べてみると、禅宴坊は祐円と名乗る僧で、現在の神山町阿野の阿川地区（大般若経の記載では「阿波川」）に拠点をもっていたこと、計23巻を書写したことなどが確認できました。一人で書写した量としてはとくに多いので、写経事業の中で中心的な役割を果たした人物と思われます。

そこで、今回発見された大般若経巻521の奥書（図１）と勧善寺所蔵大般若経における禅宴坊による巻524奥書（図２）を比べると、書写年代（嘉慶２年＝1388年）、筆跡ともに一致することが分かりました。また現在、勧善寺所蔵大般若経には、本来の巻521が欠けており、1972年に当時の住職であった今出啓淳氏が書写して補ったものがあるだけです。

こうした状況からこの大般若経巻521は、もとは勧善寺所蔵大般若経を構成していた１巻で、少なくとも1972年までに何らかの事情により流出していたのだろうと考えられます。県指定文化財の欠巻を補うという意味でも、大切な資料といえます。

残念ながら、この経巻を里帰りさせることはできませんでした。それでも、関係者の理解を得て、当館に収蔵し守ることできたのは幸いでした。

勧善寺所蔵大般若経には、ほかにも原本が失われている巻があります。今後どこかで見つかることを期待したいと思います。

（歴史担当　長谷川賢二）

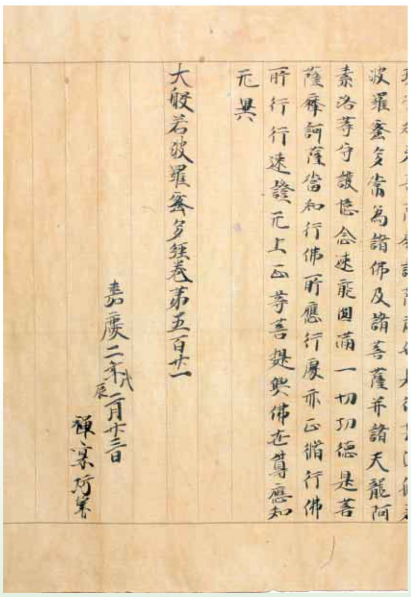


図1　大般若経巻521奥書

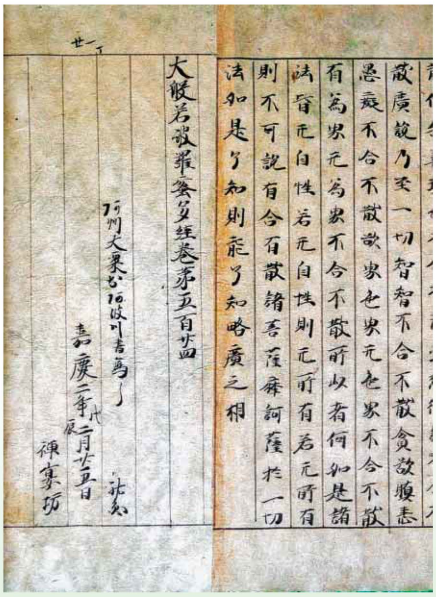


図2　勧善寺所蔵大般若経巻524奥書（神山町史編集委員会写真帳より）。「阿波川」が、神山町阿野の阿川地区に相当する。

野外自然かんさつ

磯の生きものを飼ってみよう

引潮の時に磯へ行くと、いろいろな生きものに出会うことができます。当館で毎年開催している野外自然かんさつ「磯の生きもの」でも、たくさんの生きものに出会うことができます。参加者の中には、自分で採集した生きものを飼ってみたいと思う方も少なくないようです。今回は、磯の生きものの簡単な飼い方についてご紹介します。

まず、飼育するにあたって必要な機材ですが、下の表を見てください。これらは生きものを採集する前に用意しておかなければなりません。釣具店やホームセンター、ペットショップで入手できます。1の輸送用バケツは、釣具店にある活き餌用のバケツをお勧めします。輸送中の水温変化を抑えることができ、電池式の携帯用エアーポンプ（これも釣具店にあります）を入れるためのポケットも付いていて便利です。5のコンテナは水槽の代わりです。手入れが簡単なのでこれを使います。9の砂と石は、生きものを採集する場所で採ればよいでしょう。砂はできるだけ細かく、泥を含んでいないものを用意してください。使用する前に水道水で洗っておきます。

機材が揃ったらコンテナに人工海水と砂・石を入れ、エアーポンプとフィルタで海水を濾過しておきます。人工海水の濃度は、比重計できちんと確認しておいてください。天然の海水は、雑菌が多いので使用しないでください。

さあ、これで準備ができました。あとは生きものを入れるだけです。でも、ちょっと待ってください。飼ってみたいからといって、何でもかんでも入れてはいけません。生きものの数、大きさ、そして種類の組み合わせをよく考える必要があります。次を目安にしてください（右下の写真の容器の場合）：カニ類（2個体）、ヤドカリ類（5個体）、巻貝（3個体）、魚類（3個体）。いずれも小型のものを、大きさを揃えて入れます。カニやヤドカリでは、大きさに差があると、小型の個体は大型の個体に食べられてしまいます。なお、ヤドカリと巻貝は食べ残しの餌や、コンテナ表面に生えてくる藻類を掃除してくれるので、入れておくと便利です。海藻は水質悪化の原因となるので、入れないでください。

必要な機材

1 輸送用バケツ
2 携帯用エアーポンプ
3 投げ込み式小型フィルタ
4 小型の手網
5 プラスチック製コンテナ
6 コード式のエアーポンプ
7 人工海水
8 海水用比重計
9 砂と石

人によくなれるアゴハゼ

掃除の達人ホンヤドカリ

餌と普段の手入れは次のとおりです。餌は金魚用のフレーク状の餌を与えます。日に1～2回、5分程度で食べ切る分量を与えます。多すぎると水質が悪化します。水は、1～2週間に1度交換してください。その際、生きものと石をすべて取り出し、砂をかき混ぜながら5～6回、水道水でよく洗います。最後に、新しい人工海水を入れ、生きものと石を戻します。なお、死んでしまった生きものは、すぐに取り除いてください。

最後にお願いです。もし飼い続けることができなくなったら、元の生息場所へ戻してあげてください。

（動物担当　佐藤陽一）

筆者の自宅における飼育状況。コンテナ（D27×W36×H14cm）にコシダカガンガラ、ホンヤドカリ、ヒライソガニ、バフンウニ、ヒラムシ類、アゴハゼ、ヒメハゼ、ナベカなどが入っている。

7月から9月までの博物館普及行事　あなたも参加してみませんか?

シリーズ名	行事名	実施日	実施時間	対象（定員）
歴史体験	火おこし①	7月22日(日)	10:00～12:00	小学生から一般(30)
	勾玉をつくろう①	8月26日(日)	13:30～16:00	小学生から一般(30)
	土器づくり①（10月7日土器づくり②とセット）	9月9日(日)	13:00～16:00	小学生から一般(45)
野外自然かんさつ	貝化石を調べよう①（現地集合,7月15日②とセット）	7月8日(日)	13:00～15:00	小学校高学年以上(30)
	川魚かんさつ	7月15日(日)	10:00～12:00	小学生から一般(40)
	漂着物を探そう！（バス使用）	7月29日(日)	9:00～17:30	小学生から一般(30)
	水生昆虫の観察	8月4日(土)	10:00～12:00	小学生から一般(50)
	セミの抜け殻を調べよう	8月5日(日)	10:00～12:00	小学生から一般(15)
	地質ハイキング～上勝編（現地集合）	8月5日(日)	13:00～16:00	小学校高学年以上(30)
	鳴く虫の観察	9月8日(土)	19:00～21:00	小学生から一般(30)
	河口の生きもの（現地集合）	9月9日(日)	9:30～11:30	小学生から一般(60)
	ざくろ石を探そう！（現地集合）	9月16日(日)	13:00～15:00	小学校高学年以上(30)
歴史文化講座	移住した漁民の話（海南文化館）	7月22日(日)	13:30～15:00	小学生から一般(50)
ミュージアムトーク	みやびの世界ー阿波のやまと絵画家ー	9月8日(土)	13:30～15:00	小学生から一般(50)
みどりの工作隊	押し花カルタで遊ぼう	7月22日(日)	13:00～16:00	小学生から一般(36)
	葉っぱのスタンプをつくろう	8月19日(日)	13:00～15:00	小学生から一般(36)
室内実習	貝化石を調べよう②（7月8日①とセット）	7月15日(日)	13:30～16:00	小学校高学年以上(30)
	化石のレプリカをつくろう	7月29日(日)	13:30～15:30	小学生から一般(20)
	標本の名前を調べる会	8月22日(水)	10:00～16:00	小学生から一般
	ミクロの世界ー電子顕微鏡で植物を見よう①	9月30日(日)	13:30～15:30	小学生から一般(10)
企画展関連行事	企画展「世界の甲虫」展示解説①	8月5日(日)	14:00～14:30	小学生から一般
	企画展「世界の甲虫」展示解説②	8月19日(日)	14:00～14:30	小学生から一般
その他	夜の博物館　ドキドキ体験ツアー	8月4日(土)	19:30～21:00	小学生から一般(20)
	準昆虫分類学者養成講座ジュニア（2日連続）	8月7日(火)	10:00～17:00	小学校高学年～中学生と保護者(30)
		8月8日(水)		

◎ミュージアムトーク、歴史文化講座、企画展の展示解説および「標本の名前を調べる会」は、申し込み不要です。
　その他の行事は、往復はがきでお申し込みください。
◎小学生が参加する場合は、保護者同伴です。
◎企画展の展示解説は、観覧料が必要です。その他の行事は無料です。

●お申し込みについて●

- 1枚の往復はがきには、1行事のみご記入ください。
- 行事実施日の1カ月前から10日前までに必着で右記までお申し込みください。
- 返信用はがきの住所･氏名も忘れずに記入しておいてください。
- 希望者が多数の場合は抽選とし、詳しいことは当選された方にお知らせします。
- 原則として、参加費は無料です。

〈往信の表面〉	〈返信の裏面〉	〈返信の表面〉	〈往信の裏面〉
50　770-8070 往信 徳島市八万町向寺山 徳島県立博物館 普及課	（何も書かないでください）	50　□□□-□□□□ 返信 あなたの 郵便番号 住所 氏名	1. 参加希望の行事名 2. 参加希望者名（学年） 3. 住所 4. 電話番号

※お問い合わせは、徳島県立博物館普及課へ（電話088-668-3636）

これまでの行事から

子どもの日フェスティバル（2007年5月5日）

企画展「ミネラルズ」（2007年4月27日～6月3日）

博物館ニュース No.67

■発行年月日　2007年6月25日
■編集・発行　徳島県立博物館　〒770-8070 徳島市八万町向寺山
TEL088-668-3636　FAX088-668-7197
http://www.museum.tokushima-ec.ed.jp/